

# 文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間

会報 No.45

二〇〇八年五月一〇日発行

川崎市幸区古市場 2-109  
京浜協同劇団内  
TEL 044-511-4951

郵便振替 00250-3-18369

知的興奮、まっただなか

## 煙突男事件は労働者に訴える何かがある

茅ヶ崎公演を成功させた会 保坂 治男

二〇〇八年／湘南地域メーデー実行委員会、今年のメーデーをどのようにやったらよいかの相談になったとき、参考情報として京浜協同劇団の「ミスター・チムニー 天空百三十尺の男」の話をしました。

八〇歳近いおじさんが、八〇年ほど前のできごとを話すのだから、聞き流される程度で終わると思っていたところが、市民病院職員組合・執行委員、年金者組合・委員長といった方々から「煙突男で行こう！」という声上がり、建設組合や湘南労連・代表の方々も同意、その場ですぐ市民会館の集会ホールが契約されるという予期していなかった事態となりました。

何がメーデー実行委員の人たちの胸に響いたのか、ぼくにはまだ、善い意味で分かりかねているのですが、「やっぱり煙突男事件は労働者に訴える何かがあるものなんだ」と、しみじみ感じました。

四月二十六日、「ミスター・チムニー」川崎公演を観に行きました。

初演よりも一段と劇全体が分かりやすく、工夫され、洗練され、古木さんの演じる田邊潔も彫りの深いものになっていました。

文化的で、労働者・市民の心と心を結ぶようなメーデー前夜祭を四月二十九日に控え、田邊潔の甥に当たる人と、タイミングよく四月二十八日に会えることになりました。しかも、その甥御さんは、ぼくの高校生時代の【卒業以来四〇年会っていない】親友！

胸をときめかせて彼と会いました。おたがいに喜寿の歳となり、顔を見合わせるときには、すぐ分かりませんでした。二言三言言葉を交わすと、たちまち四〇年前に戻り、さらにさかのぼって田邊潔に関

する話を交わすことができました。

湘南地域メーデー前夜祭で煙突男のことをやるので、過去と現在を結ぶ生き証人として来てくれないかと頼みました。

四月二十九日、京浜協同劇団の方々と前後して、彼——田邊潔さんの甥——田辺満さんが、湘南市民・労働者を前に話をしてくれました。

「いまた、田邊潔が煙突に上ったときと同じような危ない時代になったように感じます。

もしいま、田邊潔がこの町にいたら、皆さんといっしょに、あさつてのメーデーに参加すると思います。」

期せずして会場から同感の拍手が湧きました。

こうしたゆさぶりのもとを創ってくれた、脚本・和田庸子さんへの拍手とも受け取れるものでした。



「ミスター・チムニー」川崎公演の舞台① (写真:長坂訓弘・以下同)

# 私も思いつきり 生きてみたい

渡辺 そのこ

煙突男のように、自分の思うがまま、やりたいように生きることができたらと、誰もが思うだろう。煙突に登って権力側から目をつけられ、それでなくても、病気で常に死と向き合っていた状態の彼と自分を比較すること自体おかしなことだが、思いつきりハジけてみたい。今まで、子どもたちと三人一組になってゴロゴロ転がるような毎日だったが、長女が私より友達と過ごすようになり、あんなに私にくっついていた次女も離れ、それぞれ過ごすことが多くなってきた。そろそろ、「私時間」活動開始かも。

今回の芝居では、初めてのことばかり。京浜以外の演出で、東京芸術座の杉本さん！いつも明るい空間の中で稽古ができるのは最高だ。昨年に続き追加公演。演劇集団土くれの女優さんたちとダブルキャスト。動きなど、自分では気づかなかったことや、同じ役なのに他の女工さんたちとの関係が、いいお姉さんに見えたり、ちよつとした動きで、なるほどと思ったり。最後の茅ヶ崎公演まで、自分が役にどこまで到達しているだろうか。今より進化して欲しい。まずは、集中して、芝居の流れを止めないようにすることかな。情けないが、頭の中が真っ白になってしまいうのも、初めて。もっと創造上のことで前に進みたいのに。集中力かな。

川崎公演を迎える数日前、職場の異動で古市場に勤務することになった。一七年間、仕事で川崎区から出たことがなく、新鮮な感じだ。しかも劇団の近くだ。なんとなく、この地域にワクワク、ドキドキしている。私も思いつきり生きてみたい。(文化の仲間会員)

ミスター・厨房

# 鍋底四十八時間の男

石山海

「ミスター・チムニー」の川崎公演楽日終了後、ほっさん(劇団の長老、細田寿郎さんの敬称)と食にっいて熱く語った。

京浜の公演に参加すると事あるごとにほっさんの手料理が食べられるというオプシオンがついてくる。馴染みの農家や部落から確かな食材を入手し、時には何日も前から下ごしらえを仕込んでおく。稽古の休憩時間などに煙草を吸いに階下に下りると、厨房で一心不乱に鍋やまな板と格闘しているこの巨匠の姿を目にする。ある時は牛スジやモツを煮込み、ある時は鱈や馬肉を裁き、またある時は大量の葱を刻んでいる。私はそんな時、稽古後のささやかな晚餐を期待しつつも、なるべく厨房には近づかないようにしている。それでも時々気の利かない若いのが厨房付近でチヨロチヨロしていたりすると、巨匠の怒号が響いてくる。

「バカヤロー！オレがメシ作ってる時に話かけんじゃねー！」

私も「食」ことには人並み以上の執着を持っている。昔から美味いモノを食いたいという欲望は強い方だったと思うが、「食」にある種の哲学を持つほどの食道楽になったのは、二十代も半ば、酷い貧乏生活を送っていた頃の影響が強い。

私はその頃、長らく失業していた。家賃二万円の殆どプレハブ小屋のような安アパートに一人で住んでいたが、それでも家賃も光熱費も滞納していた。ここには一粒の米もない。電車賃もない。知り合いの芝居すら観に行けない状態だったので、当然芝居活動も長らく滞っていた。当時、マクドナルドのハ

ンバーガーが50円だった。私は朝と夕にハンバーガーを1つずつ食べて生活していた。一日の生活費100円である。そのせいか毎日がだるく、憂鬱。しかし、時間だけは有り余るほどある。私は読書と執筆で何とかこの大量の無駄な時間を有効活用しようとして試みたが、どうしても集中力が続かない。そんな時、私は近所のスーパーへ行き、買いたくないのに陳列された食材：肉屋や魚、野菜、スパイス、調味料など：それらをただただ眺めていた。決して手に入れることはできないが、それらを眺めているだけでも幾ばくかの安堵感を感じることができた。私が閉じ込められていた灰色の部屋にはない、生命の源が目の前にはあった。

人間も生命である以上、他の生命を殺して自分の中に取り込まないと生きては行けない。どんなに綺麗な事を言ったところで誤魔化すことのできない業である。その疚しさを正当化するために人類は宗教というものを生み出したと言っても過言でないと思う。キリスト教も仏教も日本の神道でさえ根っこにある食文化の影響は色濃い。「食」は決して疎かにすることのできない人類永遠の形而上学的課題なのである。極貧に喘ぐ私はスーパーの陳列棚を眺めながらそのようなことを考えていた。

あれから10年ほど経った。料理が趣味だ。「美味いモノ」を食うことで追求することは必然の成り行きで、「美味いモノ」を創ることへとシフトしていった。

巨匠のほっさんが老体に鞭打って文字通り命を削って宴会の料理作りに打ち込む。

「何であんなに食べることに執着するのか理解できない」と、トンちゃん(若菜とき子さんの敬称)は言う。

しかし、私には解る。ほっさんは劇団員のために



「ミスター・チムニー」川崎公演の舞台②

料理を作っているのではない。巨匠は自らの内面の業と向かい合っているのだ。自分自身と戦っているのだ。

これは芝居にも通じることだと巨匠は語った。「自分のためだけに創る料理にそこまでエネルギーを注ぎ込む奴はいない。人に食べてもらうものを創るからこそ、料理人は自らの全てをさらけ出し、全身全霊を傾けて「美味しい！」の一言を言わせなければならぬ。そのためにはいくらだって時間をかけるし、金だって惜しみなく使う。採算なんて関係ない。プロ？ アマ？ 関係ない。関係ない。これは料理人の業である。何のために創っているのか？ 全ては暁とともに消える夢。地位も名誉もお笑い種だ。オレはこのオレで良しとすることに決めたんだ！ 求め

るのはただ、縛られることなき「美食」！  
この日、巨匠がこしらえてくれたのは鰻大根。巨

匠が「食え」というので、私は迷いなく一番美味しい部位、面球の部分をよそった。いの一歩に最も美味い部分をよそうなんて意地汚いと読者は思われるかもしれない。しかし、私はこの部位の旨みを誰よりも味わえるという確信があった。それこそがこの巨匠の労に報いる最も良い方法であると思われたからである。ちなみに私が今までに食べた料理の中で三本指には確実に入るほど美味かったものは、スポンサー会社の社長さんに連れて行ってもらったフランス料理屋で食べた「鰻の目玉付き頬肉のステーキ」である。一見スペアリブのような見た目をしているのだが、裏を返すとドロっとゼリー状の水晶体が零れ落ちてくる。そしてドロドロのそれに包まれた目玉が飛び出して皿の上に流れ出す。さらにほじくると眼球を釣っているゼラチン状の油や軟骨や筋肉がグチャグチャベチャベチャとこぼれて皿はもう血まみれ。こんなにグロテスクな食物を見たこともなかったが味は絶品。ゼリー状の水晶体もゼラチンも油も筋肉も一緒に口に抛るとなんともいえずトロトロクニユクニユクした食感。最初は生臭みが少々気になるが醤油を一滴かけると不思議とそれが消える。あとはもうひたすらこの世のものとも思えぬ豊穡で濃厚な風味を楽しむだけなのだ。

巨匠にその話をするに「やっぱいいモノ知ってるねえ！ 房総の方の漁港じゃ漁師たちだけが食ってるやつだよ！ オレも食ったが最高だったね！」と興奮気味にはしゃいだ、その顎には鰻の鱗が光っていた。

私もこの巨匠のように料理を作り続けたいと思っている。老いてもなお見苦しく「食」という業に執着しこだわって生きたい。

(石山海と劇団火扉)

### 創立五十周年企画プロジェクト発足

京浜協同劇団は、来年二〇〇九年に創立五十周年を迎えます。そこで二〇〇八年から二〇一〇年までの三年間で五十周年行事を行うおうと「創立五十周年企画プロジェクト」を立ち上げました。文化の間からもプロジェクトチームに参加して議論に加わっています。現在公演中の「ミスター・チムニー！ 天空百三十尺の男」は五十周年企画の第一弾と位置づけられて公演されています。

劇団五〇年間の公演の音楽をCDにすることや、記念誌の発行、そして「この日、この地でこの人々と」にふさわしい企画は何かをプロジェクトチームで検討中です。

ところで、劇団と文化の間は、いままで平和についての催し物として二〇〇二年に「平和をおもう朗読の会」、二〇〇三年には「横山茂・生きること、うたうこと―平和をおもう朗読の会二〇〇三」を、そして二〇〇五年に小西悟さんを迎えて「今『核のない平和』を考える」を開催してきました。

今年の八月三十一日(日)に、劇団創立五十周年企画の一環として、平和の催し物を行う予定です。安達元彦さんと鈴木たか子さんの協力を得て、音楽を中心とした集いを考えています。

(世話人・山木健介)

京浜の演劇・戦後編 その序章⑥

# 天井が抜けていたのは わずか三年だった

須田 輪太郎

一九四八年九月の神奈川自立劇団協議会のコンクールは、文字通り「最初で最後」の催しになった。労働者の文化的権利として当然のことのように、演劇・音楽・文芸などのサークル活動が「労使協調路線」に沿って展開する中で、東京自立劇団協議会と神奈川の協議会の誕生をみる事が出来た。

前章の「東宝争議弾圧」で述べたように、四八年に入るとGHQが占領政策の基本にしていた「民主化の促進」というテーマが、様々な局面で抹消されたり、意識的に消極化されたりする事態が増える一方で解体されていた財閥の復活、独占資本規制解除や、新憲法の戦力不保持と矛盾する「再軍備必要論」を保守系の政治家に語らせるなど、東アジアの情勢変化を睨んで「共産主義の防壁たる日本」の構築を急ぐ米国の戦略が占領政策を急転させたのだ。

「帝銀事件」という瞬時に十三人を毒殺した怪事件で始まる一九四八年は、敗戦から三年を経過したものの、まだ食糧難が続き、焼け跡や闇市を空きつ腹を抱えて彷徨いながら「いかに生きるべきか？」

を模索していた日本人が、漸く未来を見据えて街から村から工場から理想を掲げて歩き出し、それに参加する人々が日増しに殖えていった三年間でもあった。

## 「天井のない青空を見た」

敗戦く占領下という現実には惨めだが、日本の民衆は自分の意志で自分の生き方を決める自由を得たのだ。その解放感と可能性を感じた時間を「天井が抜けた時代」と、誰かが形容したのを憶えている。

中国大陸での内戦は、アメリカが支援する国民党軍は劣勢、人民解放軍は揚子江を越えて南下していると伝えられ、北朝鮮に人民軍が創設されて南朝鮮の脅威が増大するという情勢が、GHQに焦燥感を与え、日本を反共の砦にするための占領政策の改変（謀略工作を含む）を急いだのである。

もはや民主化の促進だとか、労働者の権利の擁護などといったいられなくなり、日本の解放者気取りだった米占領軍は、日本人民の支配者に変貌を遂げたのである。かくして「抜け落ちていたはずの天井」は、あつという間に塞がれてしまい、企業経営側の力が強くなるのと労働組合の弱体化が同時進行して、大企業には会社の言いなりになる第二組合が、民主化同盟という名で作られ、労組の庇護で活動できた自立劇団・音楽・文学サークルは軒並み潰れる。

ボクが所属していた国鉄労働組合は、官公労の中でも強い組合だったせいも、四八年になつても「国鉄演劇祭」を上野の都民文化会館で開き、すでに大船に転勤しているボクも出演した。「モハ30073」国鉄大井の舞台は、ダイナミックに生産現場を描いた自立演劇の代表作と後々まで語り草になる。

間もなく国鉄労働組合も民同主流になつていく。今も鮮明に想い出せるのだが、「国鉄民同」の機関紙一号の表紙に「SL機関車が赤旗と日章旗を交差させた飾りを付けて疾走する絵」が描かれていて、その短絡思考を笑ったが、オヤジ日の丸の旧鉄道省の官僚に戻りたい連中が、民主化同盟を詐称していたという説も、あながち嘘とは思えなかった。

東京自立劇団協議会は二回目のコンクールを、葛飾区辺りの公立会館で四八年夏、小規模にやつたらしいが、ボクは見に行かなかった。神自協コンクールを控えて忙しいということもあったが、川崎市役所内の神自協事務所で、三浦雅生・松岡暁子・郷里健といった人達の「劇団労芸」が、本腰を入れた活動を始めようとしていて、クロサン（黒澤参吉）・安食氏（拙文第二章参照）とボクも誘われて参加して忙しかった。後に建設座・京浜協同劇団で活躍する俳優、故原科清さんと出会ったのもこの頃だ。（つづく）（人形劇団ひとみ座・前代表

「ミスター・チムニー! 天空百三十尺の男」

# 東京たいへん、 茅ヶ崎も

制作 城谷 護

四月の川崎公演は五回とも満席・札止めの盛況ぶりでした。文化の仲間の皆さんには券を広げていただいたのはじめ、本番では連日受付や会場案内などで奮闘していただきました。

「感動した」「初演よりもぐんと良くなっていった」などの感想が沢山寄せられています。首都圏ユニオンの若い人も観に来てくださいましたが、「元気が出る、すごくいい芝居。同じ年代の仲間にも観てほ



盛り上がった終演後の交流会 (4月27日)

しい」と言っており、三〇〇枚のチラシを持って行ってくれました。

今日の若者の置かれている状況とあまりにも似た煙突男の時代。今日のわれわれに迫ってくるものがあります。時空を越えて展開する面白さ。滅多にできない作品を五十周年で創ることができたのです。

川崎公演はこのように大成功だったのですが、東京、茅ヶ崎はやはり大変です。東京は七五〇人を目指しているのですが今のままだと五〇〇程度でとどまる恐れがあります。茅ヶ崎も「成功させたい会」ががんばってくださいているので東京とは違うのですが、それでも一日だけの公演なので甘くはありません。東京と同じ七五〇を何としても達成したいのです。

文化の仲間の皆さんにも東京、茅ヶ崎で観てくださる人をぜひ誘っていたきたいのです。お願いします。

幸い、作品は好評ですし、五十周年という記念の公演なので、私たち劇団員もこの公演を成功させるためにがんばります。

## 東京公演

五月一七日(土) 二時、七時 / 一八日(日) 二時

両国・シアターX(カイ)

## 茅ヶ崎公演

六月七日(土) 二時、六時(七時ではないので注意)

茅ヶ崎市民文化会館小ホール



●京浜協同劇団 創立五十周年記念公演

# 「ミスター・チムニー! 天空百三十尺の男」

和田庸子作、杉本孝司演出

もう一回り、一声掛けて広げてください

(東京)シアターX(カイ) 5月17日(土) 昼夜、18日(日) 昼

(茅ヶ崎)茅ヶ崎市民文化会館小ホール 6月7日(土) 昼夜

いずれも昼の部は午後2時、夜の部は午後7時(ただし、茅ヶ崎のみ6時) 開演

問合せ 京浜協同劇団 TEL 044-511-4951

FAX 044-533-6694



川崎公演の舞台

(Ph:長坂訓弘)

## ◎文化の仲間通信◎

## ◆コンサートドラマ「ピアノのはなし」

&amp;アフタートーク

脚本・演出 中西和久／ピアノ 佐々木洋子／スペ  
シャルゲスト 小沢昭一

日程 5月27日(火)午後七時開演(開場六時半)

5月28日(水)午後二時開演(開場一時半)

会場 新国立劇場・小劇場

料金 一般四〇〇〇円(当日四五〇〇円)

高校生以下二五〇〇円(当日三〇〇〇円)

一九四五年五月、佐賀県鳥栖の小学校に二人の特  
攻隊の青年が訪れました。「ぼくたちは、明日沖繩  
に向かって飛び立ちます。先生、死ぬ前に一度だけ、  
おもいっきりピアノを弾かせてください。」

問合せ 京楽座 ○三・三五四五・〇九三一

## ◆川崎市民劇場 第284回例会

劇団文学座公演 アラビアンナイト

脚色 ドミニク・クックオ／演出 高瀬久男／訳

鴫澤麻由子／出演 三木敏彦・松岡依都美ほか

日程 6月12日～6月17日

会場 宮前・幸・多摩・エポック中原の各市民館

民族楽器の調べとともに紡がれる千と一夜の物語

問合せ 川崎事務所 ○四四・二四四・七四八一

溝の口事務所 ○四四・八五五・五九一六

## ◆川崎太鼓仲間響 演奏会 on the HEARTBEAT

15周年記念 若者だけのコンサート

日程 7月20日(日)午後二時開演(開場一時半)

会場 宮前市民館

料金 指定席二〇〇〇円 自由席大人一五〇〇円／

学生・子ども・障害者一〇〇〇円

演目 秩父屋台囃子・水口囃子・二足歩行(創作)・

獅子舞・中野七頭舞・銚子囃子 ほか

問合せ ○八〇・一〇三八・九〇八九(吉田)

Eメール: hibiki\_kawasaki@mac.com

ホームページ: <http://web.mac.com/arata/hibiki/>

## ◆川崎市民劇場 第285回例会

劇団俳優座公演 風薫る日に

作 ふたくちつよし／演出 亀井光子／出演 浜田

寅彦・河原崎次郎・神山寛・岩崎加根子ほか

日程 8月5日～8月12日

会場 宮前・幸・多摩・エポック中原の各市民館

日常生活をユーモアとペーソスタっぷりに描いた

辛口ホームドラマ

問合せ 川崎事務所・溝の口事務所(電話)は上記

## ◆人形劇俳優・平常の世界(親子向け)

①ダンボール人形劇 お花のハナツクの物語

②昔話・ねずみの嫁入りより マウスプロポーズ

日程 ①8月30日(土)午後二時開演

②8月31日(日)午前十一時開演

会場 神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

料金 一般二五〇〇円／学生・子ども一五〇〇円

問合せ 神奈川芸術文化財団(神奈川県民ホール内)

○四五・六三三・三七六六

<http://www.kanagawa-arts.or.jp/>

## ◎編集後記◎

「ミスター・チムニー」再演が始まりました。川崎  
公演は満席で成功しましたが、東京・茅ヶ崎はこれ  
から。友人・知人に一声掛けてください。

左の「ギャラリー」は、前号まで劇団の若菜さん  
に10回連載していただきました。ありがとうございました。

今号から会員の竹間さんに絵手紙を書いていただ  
くことになりました。

## ■文化の仲間ギャラリー■

竹間テル子 ①

